



特216
884



始



蕉門名家句集

第參輯

特
884



特 216
884

安井小洒編

蕉門名家句集

輯



尚白(一) 木節(三十二)

智月尼(二十五) 乙州(三十七)

錦江女(四十九)



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '蕉門名家句集' and the editor's name '安井小洒編'.

作者小傳

尚白

尚白は江左氏。旧姓塩川氏。幼名虎助。後大吉と改む。字は三益。伊勢朝熊の人。近江大津に棲居し医を業として芳齋と號す。俳諧は始め花の本貞室に学び、後田村不トに就き、貞享二年二月芭蕉京師奥錫の時其門に入る。近江蘇門の故老たり。別に木翁と號す。晩年咽のほとりに瘡を患ひ、よりに老贅子と號せしが、享保七年七月十九日瘡潰えて歿す。享年七十三。全地妙光山本長寺なる先登の傍に葬る。

同年十月、門人苗村宰陀、二月坊園入、貞悼集『夕かほの歌』を編す。

其櫻著にかゝるもの、『狐松集』(貞享四)、『夏衣』(元禄三)あり、又『忘梅』の編あり。當時刊行を見るに至らず、後安永六年に至りて上梓さる。

尚白の母本句に遊び

時鳥風鈴はつして待夜哉 (ひとつ松)

花ちりぬこれを名つけて姥櫻 (玉藻集)

算の吟あり。

尚白の子を稚明といふ。字は更白。魯所と號し、
醫を継ぎ法橋に叙せらる。明和四年八月十三日歿。
享年不詳。

かつらぎや柳をさかろ星一つ (ねなし草)

時雨るゝや墨一帯峰の雲 (菊十歌仙)

奠章

朝白の顔さへむかしくかな (多かほの歌)

正秀追悼

其ひとり影を少なり月見坂 (木の友)

掃て居る跡より花の落葉故

白晝の鶴や小春の軒端まで

遺吟此他尚あるべし。

木節

木節は望月氏。稽翁と號す。近江大津の医なり。
元禄七年芭蕉翁浪花の花屋にて病臥の時、深く此
人を信じて其診療に頼りし事、枯尾花に見ゆ。
其歿年等を明かにせず。

撰著に『布瓜』(元禄十三)あり。

智月尼

智月尼は川井氏。大津の荷問屋佐右衛門の妻と傳
ふ。又知月とも書す。歿年詳ならざれども寶永五
年頃七十餘歳の長壽を保ち居たるものゝ如し。
其子乙州、乙州の妻荷月、亦芭蕉の教を受く。又
水仙の花うつくしさ葉まで猶 (智月尼 秋しくれ)

の吟あるを見れば一家皆句に遊びしものなりん。

乙州

乙州は川井氏。杵々庵と號す。智月の子なり。寶
永六年芭蕉の遺稿『笈の小文』を上梓し、正徳五
年隨筆『それく草』を著はす。其歿年等を詳に
せず。

妻を荷月といふ

月をかくす雲はとふしたじやら (荷月 笈の若葉)

の吟を傳ふ。

錦江女

錦江女は近江大津の原田正心か妻なり。『砂つはめ』
(元禄十四)に「錦江女」とあるもの、『それく草』(全
上)に「大津尼錦江」とあるもの亦同人なるべし。
夫正心も俳に遊びしと見え、當時の書に

茄子木のまふ日面や境垣 (大津原田 藤柳子景)

芭蕉翁百首選傳

花ちるや六字の湯の鉦の音 (後の旅)

千代の春道具の鞆も虎の皮 (元禄十四)

芭蕉翁七回忌追善

俳諧の師かないのてや猶時雨 (大津 正心 雪の葉)

并の句を散見す。

尚
白

奈良物もよしや柏の夏こたち
つかか程こゑはたつとよ郭公
水底の影や瑠璃灯飛はたる
古家の蚊屋に織てる蜘蛛の糸
すむ人を蚊はわめき出す小家故
かむよりもあふなし運か氷室守
花さかりあぢないものはなかりけり
待ほどに六月晦日はとゞきす
一葉や硫黄の帆影けさの海
鶯や稚責過たる里つゞき

(新玉海果)

(俳諧雑巾)

(續虚栗)

やはらかに女松生そふつゞし哉 (續虚栗)
京へのほりけるに
茶屋かりて半途にかゆる衣かな (ひとつ松)
舟いぬる膳所松本のしけり哉
松の濃く楓の薄き青葉哉
苔をとる枝たち花の匂ひかな
里の女の帷子早し 神 祭
丙寅五月九日の夜三井正法寺燔の中に見える
焼雲や繪馬を問す 郭公

うていはぬ寺に尋ねん郭公 (ひとつ松)
 道にあふ馬子さまたけて郭公
 山いく重形はしらすかんこ鳥
 ふる里は童部の時の櫻かな
 青梅を柝袖にほふ遊女かな
 あちさぬの花や丁の日咲てめし
 都路や砂に瘦たつけしの花
 芦の江の巻葉にさもる螢哉
 種はあり此おく山のゆりの花
 蚊をひとつ挟さかむけに栞さけり
 鼻にいり咽に鳴蚊の夕哉
 帟帳つりて梅なつかしみ夏の風
 夕日影生かへる蟬のかなしさよ
 山門に竹のちくふてふす猪哉

若竹や長者屋敷の今に有 (ひとつ松)
 桑の門いちこの黒き朝かな
 雨の日の木枕寒き五月哉
 桐油に酔ひ梅に醒たり 行の雨
 稲若く直菰のはらむ五月哉
 百草の露まこなはぬ競馬かな
 日の影に露もつ草の茂り哉
 引ほとに江の底しれぬ葦哉
 鮎二つ客三人の今宵かな
 いつの露たがねり置て氷室山
 よへの夢あもへはさはし雲の峯
 ゆふ立や田中の寺の瓜の花
 伊藤正治忠悼に
 獨置て帰れはいつこ夏の月

木の陰に小性瓜むく流かな (ひとつ松)
 虫はさんけふ初雪の富士嵐
 夕かほの屋ねに桶ほす雪かな
 晝貝の陰に鯉さる端居かな
 かたかけて蓮の露を手水哉
 下桶行清水聞出す山路哉

三井の卒なる大練寺の清水は名にしあふ
 大津の
 練貫の清水かしこき誓ヒ哉
 只白き扇をこのむなかな
 涼しくて松の木匂ふ太山かな
 枯て丘に涼しかりけり竹帚

河毛定共法跡の年に

秋カ夏を人にしられしつかり哉 (ひとつ松)
 山里に喰ものしるる花見かな (阿羅野)
 この比は小粒になりぬ五月雨
 かたひらは淡黄着て行清水哉
 「其枝」「真木柱」

東なる人に申遣しける
 一夜きて三井寺うたへ初しくれ
 吾書てよめぬもの有り年の暮
 湖を屋ねから見せん村しくれ
 「いつを昔」
 「まはり待人あてき(いつを昔)暮の松原」
 「一めぐり人待かぬるをとりかな」
 母におくれける子の哀れき(花見車)前書ナシ
 1面ツ子の(花見車)
 をさな子やひとり食くふ秋の暮

瀧師の其比清ししらかさね
こからしや里の子覗く神輿部屋
葉積て廣く淋しき枯野哉
十月や草まだ見ゆる庭の隅
水札鳴て神杉すこき流哉
(阿羅野)
(前後園集)
(いつを昔)

(俳諧錦繡)「志」ト前書アリ

扇折子に耻しきけはひかな
つぎはきて彌寒し厚衾
彌生三日枕買子のすかた哉
闇にとて雪待得たる小舟哉

「舍利講辨み侍りしに十如是の心をかもしひよ
せてこの心に叶へきを拾ひ出侍る」ト前書シ
テ各家ノ吟九章アレ中

秋の田やはかり盡して穉二儀

篇の末て初潜なる小池哉 (其 萩)

ひかみ

十月や余所へもゆかす人も未す
左義長や代々の三物焼てみん
晝は寝て夜念佛涼し草の庵
「新撰都曲」

舟人はおいくまねく鹿驚哉
子其には初聞されぬ調月哉
舟人にぬかれて乗し時雨かな
(猿 蓑)

草津 (韻寒)前書ナシ

晦日も過行うはかいのこかな
みちはたに多賀の鳥井の寒さ哉
「藁人形」

世中はこれより寒しはちたゞさ
みとり子や此比歩む夏衣
躑もなき向ひ近江の菖かな
ぬしは誰レ木綿なたる秋の雨
名月や大津の人の人がまし
「室陀橋本」
「花つみ」
「江註子」

菅原寺にて

四條へのぬけ道すゝし梅の風
さる人の紋見付たるあふき哉
はせきの別に
夏衣妹並ぬふてまいらせよ

病後 一本俣しける人に(室陀橋本)

すまふとる心になりぬ秋のくれ
「室陀橋本」
「かせ(室陀橋本)」

乳のみ子に世を渡したる師走哉 (猿 蓑)

時鳥けふにかきりて誰もなし
さみしさに客人やとふまつり哉
あなかに鳩とせりあはぬかもめ哉
菜畠や二葉の中の虫の声
降りかねてこよひになりぬ月の雨
僧正のいもとの小屋のきぬたかな
ぬなか間のうすへり寒し菊の宿
よこた川植庭なき柳かな
野の梅のちりしは寒き二月哉
一枝はおらぬもわろし山さくら
「室陀橋本」
「わろし(梅畑)」

昇獲牌掛

秋風や田上山のくほみより (煥 養)

はじめての人にほくこのまれて

あひ思ふたつの中のをいのこ哉 (西の雲)

つふくくと梅咲かゝる霞かな (桃の實)

芭蕉門古人真蹟

涼しさや北よりおこる帆掛船

おもふ事紺にそめたる躑かな (句兄弟)

傷七師終焉

しけ頼に紙子取あふ御影哉 (枯尾花)

芭蕉翁五十日

かさ餅や雪に行脚の立すかた (木からし)

逢坂や鶯さかほ小閑越 (韻 塞)

あり馬の楚たて、行や夢の種 (初 蟬)

梅に咲たては答むや 梅の花 (元孫拾遺)

手をさして誓女かしこまる火爐哉 (表の名残)

もゝちとり都は別の日和哉 (末若葉)

大根の大根になるしくれ哉 (末若葉)

秋の声 佐夜の中山 休な (篇 突)

すたりたる椿咲けり御代の春 (篇 突)

白はりの久しうともる燈籠かな (泊船集)

鶯や稚責過ての里つゝき (積猿養)

節季候や弱りて帰る藪の中 (車 路)

やまさくら銭をつかへは坂しなし (車 路)

千句巻頭

(おなじ草)(獅子初狂)(朝日川)(忘梅)前書ナシ

ほととぎす其日くくの初音かな (駒 取)

松はらや鶯の羽かいの下すゝみ (松濤集)

けさの日や小半時計秋の色 (松濤集)

落葉してむかく坊や柴の庵 (忘梅)

雪にたつ乞食か草履買てやれ (忘梅)

けふはみな鳥羽にそろ小や帰鷹 (三河小町)

浪花津の片はなもつやふちの棚 (三河小町)

無名庵にて

面白うやぶれ庇の涼しさよ (四山集)

さむき身に果報すくなき虱哉 (鉄籠賦)

水はよし小篠は若し鼻のさき (車 路)

むつかしや嵯峨にも置す虫の声 (晚山集)

あらあかや年の旦の鐘の声 (能登釜)

鶯の人におかしきてふり哉 (神之道)

てつと置露や神代の春の物 (珠洲之海)

きりくす啼や背中を這ふごとく (されく)

ほととぎす鳴やからすの居ぬところ (社標集)

色よ香よ有て過たる年忘 (白馬集)

見えましたお相模見え見えました (花の雲)

閑居のじょうを

竹といへは痕菽梅は老木かな (三葉集)

塗桶にはまるや蚤の運の末 (錢龍賦)

かたひらの尻はつかしや今朝の秋
天岩戸 尋入岩戸のおくや 桃の花 (菊の薙)

芭蕉翁十三回追善

なきあとや弟子の教てふ遅櫻 (東山万句)

題屈原 (羊かしら)前書ナシ

蘭菊にひかむや老の一やまひ (ねなし草)

水仙の北はいくへのなみの音 (室陀橋本)

しら玉か鳴くくひすの口なみの (室陀橋本)

何時て鐘なき里の誅子とり (友の若葉)

送り火や消行跡は水の月 (室陀橋本)

半月や黒ひかたより片しくれ

梨川追悼

かけろかや王城の塵一つのみ (梅のわかれ)

花なから功こも里の菜汁哉 (菊十歌仙)

曉は黒津に帰るほたる哉

梅の風蓋あく虫の古巢哉 (百曲)

梅咲てうこめく虫の古巢哉 (横平衆)

たるなよ梅に鶯田に鶺鴒 (西国曲)

たて琴を花にくむや天の河

うくひすの下腹白し夜の梅 (礫山)

涼しさやふしの麓の小神鳴 (東山萬句)

鶯の笠着てなくや有乳山 (安良智山)

雪の間を囁よしつねの北のかた

蚊の眉に霜は置すやあち山

妻恋て馬鹿幾人か有乳山

荒乳山春から今にしくれかな

園室生の越路に吟行のつるて大津の駅にしてと
とまること教日にして北にむかふ世に手をかけ

涼しけに歸出むかふ舟路かな (友の若葉)

ともな小人雲鈴子を見送るとて

虫はしやさらへえて帰る友の文

空か身か寝てか覺てか蝶の夢

和角か家に庚申を待ける夜

うくひすは寐たれて寝ぬて竹の声 (室陀橋本)

正月をやつしてかゝる柳かな (忘梅)

やふ入に交すゆるか恋しらす (獅子初狂)

辛久しく世をりす色のつはきかな

賣てみれば白魚はうき名せけり

比良小松ひばり囀る日になりぬ

逆さまに落たる声か山雉子 (音歌鳴きす(忘梅))

雉子啼て俄に近し前の山

川わたるとて鹿の角落にけり

角落て鹿はうろくなみた哉

又兵衛か浮世になりぬ遊

春風や野にはやくと辛菜咲 (室陀橋本)

朔日の有明山や花卯木

卯の果はくらかり峠かな

是はまたあまり雲井のほときす

角落て子を産て鹿の罪もなし

夏の夜の霜やかよりて瓜の味

へら鷺や竹子ときほの堀の水

頼江君

蝙蝠をあふよて鳥や友交らみ

微妙寺にあそぶ

吹出すや過し五月の下清水

浮御堂あしへは近し天の川

踊子やかき消やうに稲荷山

頼白柏子 (室陀橋本)

月は入る法花経うたへしら柏子

一とせ八月十五九月十三日ともは雨かりければ

雨の月いかにふた夜か二夜まで

病起

湯をあひた後のこころや水の月

九月十三夜

後ならぬ青貝てるやけふの月

客立て鹿の音ちかし山かつら

女郎花さひしき盆の名残かな

「今の月日」「忘梅」

室陀か庭の菊さかりなりける頃招かれて

破風折て菊の間深し雪中

鴨立て日は薄雲に暮にけり (室陀橋本)

「詠諧家語」

しら露を桔梗のはなに幾袋

すけ笠をとれば案山子はなかりけり

山水をちよつくとかするしくれ哉

万祖亭にて

面行もしはし棚かるしくれ哉

雪の道人は梢のからすかな

鶯のはなのさかりの御池かな

折れ散してあましけりな山茶花

はち相宿には妻か何をして

夜るはけに晝もあやなし杜杞の花

袋には小野小町かぬのこ哉

殿を乗せて馬方さむき走路かな

野は枯て月の出へき薄もなし (室陀橋本)

小なりける世日は(獅子物狂)前書きナシ

うくひすの日ひとつたれぬ師走かな

奉納三句

北野

梅の花守るや太夫か笏柏子

三井寺護王

入合の鯨かふく敷さくら花

石動不動

虹の羽の及はぬ山のさくら哉

畫讚二句

一休

蛸は飯王子は水の泡とのみ (宰陀橋本)

蛙

水の月何をもかきて啼蛙

律師千那迦国に

帰命盡十方霞の関もなし

州士か東武

夏は水但あたゝめてのむかよし

宰陀か温泉より帰るを

山は雪暮をみて帰る事はやし

雲鈴か佐渡はくたるに

首途に水無月はらひ身は裸

五万句興行の巻頭

神松の久しき株やわかみとり (宰陀橋本)

近江八景ノ内

石山秋月

月はすむ夢のうき橋いつくとも

比良墓雪

比良消て初雪高しゆふま暮

夕顔のさかりふすへや老の秋 (夕かほの歌)

きのふは木種けふは朝白にて暮しけり

葉を立て湖水に泥む燕哉 (水の友)

寝しやらす誰か比目の青簾

山彦やつま乞鹿の片こゝろ

撫てをけ盡せぬ宿のすゝ栴ひ

酒井氏逝去し給ふに発句せよとすむる人の有けるに

村くの養虫も江のなみたかな (宰陀橋本)

淳兒は清貧

とる物もやるものもなし宿の秋

日をさして初夜の終りや合歡の花

ウ月か越文におくれけるに

こはい物なしとおもふなむかし草

前大僧正旭海比丘し給ふに

打乗て四手の手輿や雲に声

三井寺僧の早せしけるに

牡丹花の沉やはてし袷袂の影

三井寺の鯨か吹か花の波 (鴨の矢立)

粟津か原合戦の事 (歌題)

新てはや議うつ波のまくり切 (俳話温故集)

此ころの肌着身につく卯月哉 (嵯峨日記)

還岐

またれつる五月もおかし聲 粽

小川ともならて田に入清水哉 (初つし果)

紅梅のつほみにつくや鳥の声 (忘梅)

まつもつて梅の赤さよ今の京 (元禄五歌)

誰か来て天井はらん菊の宿

隠者を訪ふて

世につれて花もちいさし宿の菊

花咲や五月の菊の尺あまり
哥人の鳥帽子つふすや櫻花
家さくら一人かいねは又一人
やま櫻又亭坊の卑下はかり
疵までも世のにさわひや四方の花
花見せよ家に帰れば予共啼
心なく京の地をふむ花見哉

(忘 梅)
(元禄五感)

草庵

佛壇の戸をさし廻す花見哉
はな守りと見れば乞食の頭かな

遊女追悼

散しほの又うつくしき紅葉哉
郭公あれはとなたの山林

ひつち田の麥より青き時雨哉

(忘 梅)
(元禄五感)

又いやけしきの杜の夕鐘(しく悲)れ
舟人のいへはそれくくしの峯
馬士うたふ方へ舟やれ霧のうみ
うつくしの海のくるりや朝霞
手習子聞や瞳のかねのこゑ
糸ゆふや目留て見れば闇敷
いと遊や行まきるゝ写しもの
臨濟の鉢に目見出す霜夜かな
夜神樂や襟にあられのはくほろり
やかましきあるしは聞ぬ雲かな
いかぬ木なかく氷る田面かな
立まはる間に氷る田面かな

御神や無事に通して郭公
六波羅や禿聞出すほとゝきす
大水の後の心やけふのつき
草も木もさのく月の盛哉
須磨人や月見にこなる半はかま
星月夜てらの高さよ大さよ
おぼろ月てゝろにかゆき目いほ哉
初雪や一返ふりて散紅葉
雪吹して北の欠たる三上山
うしの日に降出しけり春の雨
寺子ともあかる時分歎春の雨
をし鳥のさたなく成ぬ五月雨
白雨やけしき見て立雀とも
大風や鳴しつまりて秋の雨

(忘 梅)
(元禄五感)

雨ことにうは水はしる清水哉
床や山鳥の尾のとり廻し
木からの夜半にや君かひとつ前
花の色もおもへは青し梨の花
海棠やおしろい氣なき花の色
山茶花の只今咲て散にけり
面白き櫻の後やもく蓮花
三月の風吹なやすさふし哉
借宅にぬし付物やもゝの花
虫になるつほみ欠たる李哉
山吹の莖立見はやはなの後
櫻咲里にかくるゝ公家は誰
てたつまもなく木高し桐の花
生れ子もくふ事知や柿の花

(忘 梅)
(元禄五感)

雨蛙の幾筋ふりてくりの花
中くにはやるとうき世白牡丹
芍薬にうき十葉のしけり哉
鳥さしの目に物たつや夢の秋
清かれとすこし茶をする庵哉
白歯なる早乙女そろふ御田かな
猪の鼻に苗代水や吹あらし
種蒔て神主よふや鯉しる

(忘 梅)
(元禄五感)

月次興行の初會に堅田(まかりて)

江の梅のかたまり初る一夜かな
つやくと林檎すしき木間哉
浅ふりの薄刃に付や水一重
長茄子土に薄帯一重かな
百なりて中にひとつのひさこ哉

いな物にあやかり安さかひ子哉
春開てしめり心やぬる胡てふ
登見や舟にもものらす岸の寺
手の行ぬ背中を這や蚤の知恵

(忘 梅)
(元禄五感)

庭前

木々の蟬堂か宮かの如くなり
酒たらぬ宵の寐覚やざりくす
虫の音や嵐のすゑにこけて行
鎌倉の海邊をのす燕かな
さゝ波やさんさめかして帰雁
戻むけて八幡を立や帰かり
糸遊につゐて上るや夕ひはり
菜はたけやかゝみくして片鶉

木梨の露を李白か肴かな

(忘 梅)
(元禄五感)

一龍七母の追善に

わか草のまた嫩をみぬ別かな
萱草去年も生けり此所
高浪に芦津のめたつ寒さ哉
石竹に願し程の小雨かな
節虫や羽はへて飛ふ仙翁花
相應に乱るゝ萩の小庭かな
淋しさや皆枝になる鶏とう花
紅茸や龍田の神の小物なり
枯くていよく穂せ薄なり
百性に妙薬習ふ枯野かな
水の月何をしかきてなく蛙
あくへなく思ひける哉宋子かひ

鼻こゑに鴨鳴渡る寐覚かな
をし鳥の恋に目を引けしき哉

(忘 梅)
(元禄五感)

城下にて

めてたさやつれ着給ふ御鷹狩
巢をとるもしらて口あく雀哉
嬉いろふ心中よはし猫の妻
さほ鹿や靈芝いたく萩角
手のきかぬ妹に見せたきめさし哉
しら魚や舌三寸に消て行
江の水を鮎に押出すいさゝかな
天降る星をはらむかあめのいを
大福の癖になる朝な夕な哉

元禄三年人日申の上刻なるふりければ

地震して松は子の日と諷けり

廿日の祝義に

正月のはてや東の稗たんこ
とろくと壁に眠るや雛の顔
へんくとめくれや水の小盃
官人やあつかひかゝる雑合
塩てへて草の香淡きちまさ
小法師の筒井をはしる印地
名はいはし今宵数多の星の中
木津川や白に棚かく星祭
八朔や野分の後の糸ふくろ
八月の竹かさりたき朝かな

重陽

(忘 梅)
(元禄五庚)

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

寒菊の納すきたる節句哉

下帯の結目たかし夏衣
秋風や死てこないの痘のあと
ななき日や雀の親のあかくこと
長夜や押つけてなく鳥の声
短夜を昇てありくや酒の酔
新米のしたれ心や秋のくれ
祭(しもとつに成る暑さ哉
小すまふのきたなく勝や藪刀
て首とる田舎坊主のすまふ哉
間日に出て疲落すか相模とり
大根の下し鱈やふゆ気色
つゝくるや妹か見ぬ間に破紙子
糸袋晝は衣桁の霞かな

(忘 梅)
(元禄五庚)

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

懐に足袋あたまむるわかれ哉

稽着て小扇あしき端居哉
客は誰乳母か所に背すたれ
竹婦人そはに机やたはこ盆
五三日鯉あつけたし氷室もり
むし干や青雲見ゆるあかり窓
夏瘧や我は羅漢の何番自
留主つかふ後くらさよ冬ふもり
遅くさき糖の身ふるひや夏の海
さむしろや夜うつ賤の膝かしら
果報者よねはんの庭のたふれ死
一休につふりはられなうぬ佛
うぬ佛はやからかねのはたへ哉
餅染てかうて信あり御めいかう

(忘 梅)
(元禄五庚)

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

佐保姫に付て廻るや尾長鳥

坂本の酒のさつさよかみ祭
させることなくて吉田の祭かな
辛崎の火を見物やゆふ板
つぎはむる気違なされ御板川
千鯉に衣かへけりゑそのひと

(忘 梅)
(元禄五庚)

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

なりの京中將姫の誕生室にて

佛舍利を根にこそむすへ小姫ゆり

(かなし小み)

追悼

一夜塚珠は茅花をおかみけり

(非禮遺墨)

△年代不明

伏見の里に尋ねる事の侍りしに何某遊君の石
塔のあり是は幾とし先にやあひみし事のあり
しかよそはつかしき老の泪をおさえて

散さまの猶美しき紅葉かな (小太郎^申)

此句ニ左ノ添書アリ

二十とせささきの句とて木箱、尚白いつてや初

語甲されたる書付しんせ候

法師

荃溼様

木 節

神奈孫の跡追ふ翁かな (ひとり松^す)

塔に寐て獨秋まつ小僧哉

すむ月に物おかしかる娘哉 (前後園集^下)

袴士の見かへる跡や鷺の中 (猿蓑)

夏かすみ曇り行衛や時鳥

ひね夢の味なき空や五月雨 (芭蕉^望)

たゞ暑し籬によれば髪の花

木履ぬく傍に生けり蓼の花

乞食

粒鉄のさしもたらすや春の草 (西の雲)

蓮のかや(藤柳子葉) 獨居や殊に瘦たる身の涼し (身は藤柳子葉)

寒き夜の蕎麥の袋や鼠喰

雪の日や精進あけに並ふかほ

落髪の日ゆかしさよけしの花 (豊梁合)

ゆく川の心うこかすほたるかな (己か光)

(芭蕉望)「古翁の光りしやうく(消て門人流

行の神を失ひ連歌の癡りたる風

容いと口惜なと朱拙子とうなつさ

あひて寄主の情を映ふ」ト前書アリ

下帯（藤柳子集）

檜鼻（芭蕉）

下帯は竿にかけつゝ冬筆

（己か光）

一しきり世の葉曲るあつさかな

（藤柳子集）

春雨や湯殿にたまるすまし物

あくへなや双の岡のつくくし

芭蕉の旧巻木曾塚にて史邦に別る

涼風になまり行らん馬の鈴

二度生の齒も落果て清水哉

母の身まかりけるに

升かきを切て間もなし早稲の佛供

湖のなれの果見よ橋の月

所化の白見やるに寒し鷹かみね

芭蕉翁百ヶ日追悔

行鷹や塚の伽ともたのまれす

（後の旅）

梅吹てしらゝたけとりうつほ草

芭蕉翁追悼

「三七日間翁自畫之像乙州宅」ト前書シテ諸家ノ句ヲ出セル中ニアリ

霰ふる形は木曾路かむさし野か

（芭蕉翁行状記）

全

「四七日翁頭陀笠杖寄進義仲寺」

各題三物有句ト前書シテ諸家ノ句ヲ出セル中ニアリ

此笠はいくつのとしの雪みそれ

全

五七日

冬の日も照上は皆泣まいで

とりみだせし中にたつねられて異行

屋根葺や比良の時雨の晴て行

（藤柳子集）

芭蕉翁病中祈禱の句

落つさやから手水して神果め

（枯尾花）

芭蕉翁の病中

闇とりて菜飯たかする夜伽哉

傷亡師終焉

無跡や鼠も寒きともちから

（有磯海）

初かりや比良て追つく帆懸舟

名月や宵は女の声はかり

ひたるさよ竹の子風の窟の中

（返日記）

秋さひしいつこささして無分別

全

六七日 路過亭一座興行の内

大極の輪と消に遣る塚の霜

（芭蕉翁行状記）

全

「盡七日「反古さらへ」ト前書シテ諸家ノ句ヲ出セル中ニアリ

霜の夜や大かた小かた薄かさね

（鳥の道）

木からしや犬の鈴より鷹の鈴

伊賀にて

此瘦をまねかすとをけ薄の穂

（元禄戊寅）

遠慮なくあくびをせはや今朝の春

（歳旦練）

咲花をむつかしけなる老木哉

（積猿蓑）

妙福のこゝろあて有さくら麻

百なりていくらか物で唐からし

「淡路島」

かまくらの麓口寺に詣て(誹謗管然前書ナシ)

首の座は稲妻のするその時か(穢痕羨)

甲斐のみのふに詣ける時宇都の山辺にかゝりて

年よりて牛に乗りけり 蕪の路

菱喰もいなは最一度こちら向ヶ(砂川)

七夕やむかひ殿にも瓜なます(けふの昔)

「花見車」

丹野か父の追善

中陰の酒のさかなは昔てある(花の雲)

螢船ちるや夜明の勢田あらし(芭蕉望)

北園をへめぐりてれよりさきはゆかれ次第
なる惟然子の旅立を聞て

行旅に顔見合せよ夏の鷹(菅門文長)

智月尼

独寝や夜わたる男蚊の声侘し(母(ひとつ松)寺)

たゞありあけの月そのこれると吟しわれしに

歌かるたにくき人かなほとゞきす(阿羅野)

たつ秋に秋帷子のちゞみけり(智月(前後園集)下)

廣庭にゆたかにひらく牡丹哉(花つみ)

妻恋は人やかめん寺の猫

指さしてのひする兒の月見かな(江鮭子)

(卯辰集)「路通の行脚を送りて」
(二字幽蘭集)「路通にわかるとして」前書アリ

¹見ゆる(卯辰集) 旅人さむし石部山(穢痕羨)

ひる迄はさのみいでかす時鳥

殊を愛して(葛の松原)前書ナシ

¹夢から(葛の松原) 家してやらん雨蛙

やまつゝし海に見よとや夕日影

栴の花これを佛の土産哉

ねち上戸今日は柳にやらしませ(面の雲)

今朝からは何をしてやら春の暮(己か光)

夏菊や葉とならん 床の上 (西の雲)

かた見分とて送られしか

「伯母の身まかりしに」トシテ乙州、蘇軒句
出テタル次ニテリ

秋風に着て 泣人の 帟子かな

翁の庵の月にまいるて

去年からはたくまぬけふの月夜哉

欽鉢をあつかり侍りしか

かゆ煮たる鉢のこ寒し 棚の隅

上臈の押こめられましますとむ奉りて

初雪のあはれは 高き所かや

朝毎やちよつちよと未たる 鶉ヒナ

老の寤覚のかきりなきに

雪やけや夜毎に 兼か手をかかせ (伴諧勸進帳)

佛の日たれに わかれの 雪の肌

しら雪の若菜こやして 消にけり (卯辰集)

木曾義仲の塚に詣て、

雪消てあはれに出し 朝日塚

手を上てうたれぬ 猫の夫かな

鶯の意地のわるきも 直りけり (文蓬集)

「州之道」

乙州東行の文に

わさこさへ見に行旅を 不ニの 雪 (雑談集)

「葛の松原」此句、後ニ「大津の禪尼の子乙州か
東武の行き送れるとかや云々」ト添書
セリ

腰のして若菜つまは やうら屋敷 (杵原)

翁の伊賀へをはす時

散花も心やすしや 旅の僧

句空が大津を立侍るとき

鉢の子にうけよ 櫻はちらずとも

乙州がこちへくたりける時

首途や 幸つくくる 初茄子

何某といひたさふなる 案山子哉

御火焼のもしり物とるな 村鳥 (葎柳子集)

「盆物(炭俵)」

羽黒の呂衣はいまた若かして 風雅の友をした
ひ初て浴にのほり程なくなき身となりしこ
て尚あはれなれ

三井の鐘聞てほとけや冬の空 (北の山)

なくられてのぼる 聖葉や日のうつり (聖葉合)

我なから童部らしさよ 飛登 (己か尤)

盤子白川へ行脚を聞て

鉢の子に請よ 櫻はちりぬとも

竹子や境めもしらすニ 番生

芥子咲て見るや 近江の船の足

盆に死ぬ佛の中の 佛かな

涼しきや 夏田の 畔の 晝あかり (二字幽蘭集)

亡夫の七回忌をとふらふに 我と同じ道なる
人々の来りければ

かゝしにもあはれさま けじ 尼中間

初雪の 曇さはりや 桜 欄 幕

園の子はわろさいふらん手向花 (藤獅子集)
山櫻ちるや小川の水車

「炭俵」「笈日記」「梅櫻」「兼八郎」

芭蕉の旧菴木曾塚にて史邦に別る

宵寐して涼しく歩め朝のうち

路通面国旅寝し去年今年と立寄り文来りしき巻
句して返す

其まゝにあれば涼しき骨海月
手をつゐて月指のてく松の間
きりくす鳴やかしの袖のうち
雪の夜や臍豆腐のなつかしき
うつく時木の葉散けり井戸の外
雪信か草花珍し冬簪り
流るゝや師走の町の煤の汁

すゝみ出て瓜むく客の園吐し (藤の實)

あさかほの花にみとれて晝寝哉 (往吉物語)

嵐蘭子さいだみて

なき出して米こほしけりいな雀 (有磯海)

あろくとむかへは月の御光かな

たけのこや皮つきこはし甲武者

あふ坂やいとせき合せみのこゑ

白牡丹子は幾たりも持けれど (笈日記)

芭蕉翁百々日遊曲

栗津野に通ひかゝりて百ヶ日 (後の版)

としのうちに春立ければ 年内立春(頼寒)

冬のはるこゝろの外や梅の花

崎風はすくれて涼し五位の声 (炭俵)

ひるかほや雨降たらぬ花の良

年よれば声はかるゝてきりくす

待春や氷にまじるちりあくた

なしよせて鶯一羽としのくれ (梅櫻)

七度の花のはしめや早稲の花 (句兄弟)

立待や痺直さん白の上 (藤の實)

居待月起て守らん枕挽

寐待月船も閑は行次第

鉢扣夜更て道の廣さかな

溜池に蛙生るゝぬるみかな

手枕や月は布目の蚊屋の中

素牛を宿して

芭蕉翁追悼

「三七日間」翁自遺文懐乙州宅「ト前書」テ諸家
ノ句ヲ出セル中ニアリ

像の繪に初いひかくる寒さ哉 (芭蕉翁行状記)

全

「四七日翁頭陀笠杖密置義仲寺」
各類三物「有句」ト前書「テ諸家」句ヲ出セ
ル中ニアリ

冬の日や老もなかはのかくれかさ

全

六七日 路通亭一座興行ノ内

あとの月あもへば氷るたゝき鉦

全

「書七日」反古さう「ト前書」テ諸家ノ句ヲ出セ
ル中ニアリ

唾しだく反古のはさむ生火桶

全 別ニ捨家ノ追悼可ヲ出セル中ニアリ

いふまいとおしへと雪吹く死出の旅

(芭蕉行状記)

幽霊に水のませたか鉢たゞさ

(芭蕉庵小文庫)

水仙の花の高さの日かけ哉

〃

さかもしりや一帯にて年わすれ

〃

琴引て老をかませよ夕すゝみ

(韻 塞)

我形の哀に見ゆる 枯野哉

(韻 塞)

わらすへにゆはれ次第や芹香

(初蟬集)

花ちりてあたまにかゝる 柳かな

〃

花さくや五尺にならぬ木なれとも

〃

梅櫻九十九浦や鳩のうみ

〃

ほのくんと炭しにはふや春火燵

〃

夏瘦の白も肥たる月見かな

〃

年の氣もそこやう寒きことたつ哉

〃

湖上

はるの海ふねもその日の機嫌かい

(鳥の道)

翁の足日本曾塚にまふて

戸を明て咲花見せん 備連

〃

大小を環に問れよ春の花

(元禄灰寅 歳旦様)

幽柔うりと一度は鴨の初音哉

〃

春風に塵もほとくる水かな

(續有磯海)

八月十五日 (菊の道) 前書アリ

此心常にあらはやけふの月

〃

鬼つらに並ぬかしけり萩の花

〃

老床ねさめかちなりければ

春の夜の後夜もわれより若き哉

〃

むかしこそ今はかてえすとしのくれ (初蟬集)

逢坂や花の梢のくるま路 (浮世の北)

芭蕉翁三回忌

此墓の三とせは夢にしけれかな (表の名残)

咲花の見せの盛やいせ和かめ

ものよみや花てひらくる一葉ッ (菊の香)

とその酒九度の上や梅の花 (梅 樽)

京なるひこのもと申すかはけり

うくひすやけふ一こゑのふみつかひ (鳥の道)

玄梅子横菓のよし聞て

夜はなかしならの吐しや南園堂

長屋上人にわかるゝ

さつはりとこころもたゝかれ更衣 (泊船集)

(砂川)「三井の観音堂に月見して」前書アリ

明月や志賀の磯田の稜の實いろ (續猿蓑)

鶯に手もと休めむなかしもと

かたつあらはいさかひやせむけふの月

木からしや色にも見へす散もせず

ない(茶のさうじ) (兼枝)

有ると無きと二本さしけりけしの花

目の玉を取て出けり蟬の空 (淡路島)

目の玉は取て出けり蟬の声 臥高 (初蟬集) 目の玉は取て出果蟬のから (菊の香)

神の田や升つき見たる 繩手前

月日（日のかけぞ）を（神之道）しうくるはかりの「花見車」枯野かな
（けふの昔）

年よればなを物陰「旅袋」や冬さしき
（雪の葉）

七夕や稻の初穂の御座れ餅
（神鏡金屋羅金）

志し木の葉につゝむ伊勢わかめ
（草庵集）

我か形に成とは聞と瓜茄子
（軒水川）

世のうさや臆に成てよはひ星
（初つはめ）

春風の月に跡さす会かな
（旅 萩）

かれくと枯木の谷の若みとり
（きれく）

餅づくに鶯も来よ梅なかし
（青むしろ）

〔備考〕此句干綱集ニ

志賀津の乙州を尋侍れは初か東武へお
しむはたるとておはす知月尼に恩顧を

謝すとし比ゆかしかりつむむけかしも
まみゆることよりのほしよとて

てくさいな顔を見せけり鳩の會 知月
ときて涼しきも引の跡 百花

トアリ、因三百花ハ野村氏、金澤、書林也

三ツ子か鶯声てとし忘
（きれく）

影の繪に亦追かくる時雨哉
（蝶すかた）

濱風にねち合けしのつほみ哉
（白馬集）

我としのよるとはしらす花盛
（初たより）

老の身の形見におくる秋の風
（花の雲）

なふいかはとれとろ水鶏 郭 公

芭蕉翁七回忌
さす花にふるとかゝるな今朝の霜
（雪の葉）

うら風は松はひとりのさむさかな
（神鏡金屋羅金）

正秀東武鉄別
はる駒にしめて来よさ手細哉
（草庵集）

つふぬれや五月男の頬つゝみ
（軒水川）

うくひすよほうはかりをくりかへせ
（初つはめ）

北風にねち合菊のつほみかな
（きれく）

磨立待月うつる茶釜かな
（きれく）

鶯の声に且のおそひかな
（きれく）

息災な顔を見せけり鳩の會
（千綱集）

吹かせも心ありけなむめのはな
（三葉集）

花見席
そんならば花に蛙の笑ひ顔
（きれく）

翁をこゝとて
人は死ねしねは忍ぶでかにはらひ
（きれく）

雑 かゝる世の鉦が敵か鬼の食
（きれく）

いつつ死も（續山彦）
いつしのもしらて人とふよめかはけ
（駒 取）

泥亀もかうては果し時鳥
（きれく）

田の中に住かかゝし（渡鳥集）の今長者
（きれく）

こからしを杖に（つさけり）ついたり老の坂
（きれく）

秋風にとんとめいたる小鳥とも
（松濤集）

小町か年尾をとく

いにしへに我も直つく花の杖

「三河小町」

(松濤集)

この夢くもけさは長者の年かしら

(三河小町)

冬としを跡になしたる大桶かな

〃

是て(艶質の松)

それてこそ命おしけれさくら花

〃

はたる火のひかりまはるや尻かしら

〃

みそき

さつはりと月の晦日や髪あらひ

〃

田をかりて角力の声や村すゝめ

〃

鳴わたるひとえ秋小や年わすれ

〃

月かけに師走の罪も消にけり

〃

そのうちには久しぶりにて鳴蛙

(富座柳)

この比や人も横出す郭公

(小柑子)

老の身はゆつり合せよとしたれ
入相の鐘に瘦れか山さくら

(續山彦)

(菊の蘆)

嶋田の如舟に訪はれて

命なをあふてたよ(萩の花)

(既望)

降雪になをおほきかろふしの山

(千鳥掛)

柗柳さらく木とはおもはれす

(金竜山)

連らるゝ水をさらはの柳かな

〃

芋の葉に月の句を書假名つかひ

(笈の若葉)

折くや火をさしくへてゆふすみ

(宰陀橋本)

花の香を夜柗に懸つ夜かえ

(芭蕉壺)

花咲や近江の船の機杼かい

(雪菴集)

《備考》此句雪菴集ニ作者不審トシテ

「尼智月か句せと人の申侍る」ト添書セリ

榴鉢の音も師走の雪氣かな

(小柑子)

寐もせいて我はなせ啼夜の鹿

(摩訶庵日記)

入逢の鐘に瘦るか山さくら

(とてし)

川上て葉を洗ふたそ月の影

〃

天木にたまる月影ま一はい

〃

垣越の念佛にしはる萩の花

(田山集)

歴くの座につらなるや木仙花

(濱萩)

文舛貞悼

まつくと老の悔みや春の雨

(幻の庵)

さて小町我も因果な花櫻

(王大根)

山彦や大津とまりの花の人

(山彦)

むかしほと人もおろかやほとまきす

(杉茂太)

鶯や二つせりあふ氣あつかひ

(續山彦)

はなの座はみな盗人になりやすし

〃

画讀

あちさいはまたはなしやもの四十から

(宮前吉人真蹟)

爐のしとさしならふる事なむとはかりひて

元禄辛未「三夜於無名菴觀月」トシテ芭蕉ハ

ツメ話家ノ月ノ句ノ條ニ出ツ

手のくはに月を請たる雪哉

(聖田集)

(元禄四成)

△書名不詳

題簽落、跋「寛政十年春夏のあわい八日

房述」トアリ(橋本存謙)

天神の御ねんきにまいりて

此神の子てはないかよ松と梅

河合文七母
智月

甲く此又七も酔はしめ乙州

△出所不明

うくひすに晝笑はるゝ帽子哉
蒼なる梅あたゝむる春日かな
雪汁のぬくみいそけよ昔の花
兄弟はたんたいさかへ花にこも
桃見せて江す尿せす婢子哉
手鞠なら散れともあかれ飛あかれ
夕かほやさすかとひ人も器量ほと

(玉藻集)

我影のそれかと覗く落葉哉

母の墓にて

乙州

夏ころも夜の綺羅こて男なれ
葛屋深く人は牡丹に隠れけり
芍薬や花より清し花の莖
花あかひ日にねたれたる姿哉
今の世になかぬ産子の佛哉
時鳥妻にきせるをとられけり
京伏見山科にたつ瘧かな
草踏て足のうら見る 虫 哉
たそかれや移草深に立りけり
欄干に獨蚊しはくきせるかな

(ひとつ松)

葦の咲や親にも呵られず
名月に鴉は声を吞れけり
淋しさを我もの顔や秋の鳩
秋ひとりさへられもせぬ寝覚哉
知てしらぬ身のほと悲し秋の暮
木くの根の獨くつろく霜こほれ

(玉藻集)

わか竹や盗人迹て後の月
さも若し油づきたるしのへ竹
早苗妻老人馬をひかへたり
ふき籠り女姿のあやめ哉
草あたゝかに蹇馬の夏野哉
夏草や高股なつる 夕間暮
羨咲て雜喉腹見する入江哉
寝ぬ覚ぬ二つか中のくゐな哉
飛鳥川又浮世也 雲の峯
霞すたれ白雨残る日影かな

(ひとつ松)

短夜や小坊主顔をあらへとも
たか子や三日月あふく白團扇
松か枝に稻妻重き雫かな
そはの花櫻の志賀のあらし哉
朝の富士慕風二日のすかた哉
秋の夜やおかしき声の家つゝさ
無神月京の雨見にのほりけり
龜の甲煮らるゝ時は鳴もせず
宵くの水増水や秋の風
引まけて草に首有きり「卯辰集」
正月の四日の月の朧かな
折くや雷に寝なをる五月雨
寝た負のあさにニツの夕哉
馬かりて竹田の里や行しくれ
(後 兼)

鉢たゞき憐は頭に似ぬものか
すゝ風や扶より先に百合の花
日焼田や時「折く」(俳諧観音)つらく鳴く蛙
芭蕉葉の打かへされし月夜かな(卯辰集)
はせを葉や折かへし行月の影
「蕉人形」
武江におもむく旅亭の残夢
寝くるしき定の細目や闇の梅
木曾塚
其春の石ともならず木曾の馬
螢飛疊の上もこけの露
一笑掉
人々の句を吟しあはれ竟てそかつたなきをのつから益草の巻と成ぬ

よしや唯唯よしや只秋の暮
たのみある中とうなはれしに
先酒は細殿よりや初さくら
十五の春とかや
鶯や鞍馬法師か十二段
路邊の行脚を送り侍りて
いたつらに燕巢かけて阿弥施並
雨乞やあふみと成し川「卯辰集」の敷
續けたる息おそろしや蟬の声
舟よりあかり越前の府中に越る時
袋角それや鹿の子の愛の情

一息は早百合も寝るか夜のみしか
死人花どの兵か弱者か
三井の別院定光坊に養せられて半日の閑さたのしむ侍りて
色鳥の鳴に出けり長等山
伯母の身まかりしに
新酒まで盃とりし佛かな
粘念三廻足
秋も半わるいか人もなかりしに
死ぬるとも居るとも秋を飛虫
辛むしの喰ひ肥けり丸はたか

粟の実の有にやまかすえのこ草 「巴か光」 (西の雲)

桑門の翁とし未の夏さよ波や打出膳所の
納涼にめて木曾塚の草の戸に見盡す秋の冷
しく尚風雲情たえかたぐやそこの人に文
殊して行給ひしかいつちしらす

東むく雲や寒しはなれ鷹

つゝかなく肥しの米もくれにけり

皆あのか身にたふさるゝ雪の竹

小女郎にも走りまけたり夕時雨 (俳諧勸進帳)

半俗の老のか姿よ 雪の竹

春の夜も更て寒けり小桃灯

桃の花や葛の松原
人も未す葛の松原
桃さかば雛に似たる人や未人

病中吟

かけろふにたか起ふしや耳の鳴

しとのゝへ引泉さるゝ雲雀哉 「三河小町」 (文蓬葉)

小杉一笑追悼

我はかり啼せて秋の石佛 (雑談集)

こからしや百八なから鐘の色 「声(室陀橋本) (北の山)

日出の鐘なりけるかけしの花 (盟葉合)

降出してはらく 雨や虫谷 (己か光)

江戸よりの登にせし参りて 参宮せし時(柞原)

あひの山誰追かけてほとゝぎす

煙にも腹ふくらかせ若たはこ

我声のすごきもしらす鉢扣 「柞原」

越の浅生を出るとて

朝風や雪の玉江の蒲裏肺 「二字園蘭集」

田家

早稲の食はや焼たつる夕烟 (俳諧勸進帳)

此秋も鳴てこなふて屁こきむし

此儘に罪つくる身の日は永し (卯辰葉)

浮雲にまきれても行夏の月

幻住庵の夕を尋て

水汲に跡や先やのほたる哉

すゝしけに蘇積屋か家の川柳

つかくと露けし居所の女郎花

翁の捨ゆく庵に行て

蓮からの猶うそくと行衛哉

恋しさもなく寝られぬ師走哉

八朝や脾の臓つよき柿喰ひ

田上川をこゆるとて (旅袋) 前書ナシ

谷こしや空ふく風のか人こ鳥 (二字園蘭集)

稲妻や何にこたへて止ほてき

うくみすや背戸かどしりぬ鳥羽糖手 (柞原)

雲の峯あまの羽衣干て見せ (蘆柳子葉)

旅する身の行衛おしひやゆるゝてかし

旅人の葦の供にや行胡蝶

舟のほとをしれといへるヒ文字を起へは

家鴨と見られて安し春の夢

お子の花散しつまりて佛在世 「げし如や(讀稿集)」

目をあけは月よふさりは時鳥

小佛をあつめて涼し浮御堂

ぬか星や清水流るゝ西の面 (藤柳子集)

武江より上るに南江とかやいひし茶やに宿りし
か其夜白雨しきつて前後の百川住未留りぬ明れ
は空にくけにたりわたり重顔の眼りもきやう
くし鳥にさめ旅は種もあかく相客の興かる
難談盡果ければ

園 (の) 咄し續きやかんこ鳥

武者稽のかけ物に発句このまれて

歎ひの身か夏の夜の暮一番

螢谷出る螢の雪かな

羅旅

汗かきの瞿麥くしる泪かな

草も木も一息寂人五月間

嵯峨かつらに暮して

夕陽や材木店も薄紅菜 (藤柳子集)

今日月に召るゝ神は何番目

雷もおとろふ秋の行衛哉

北州の人とならばや蓮のかり

越の湯涌は景色異替り入湯のいとまは前の
流水に遊ひ絞主するも保養のふとつか

湯臭やなごび鮎かゝむ石の間

痕の身もたのまれぬ夜寒哉

客舎吟

軒かく小者は蟲の鳴音にて

秋野のゝ花くしさよ皮肉骨

しのはらの古戦場にて

茶蟹のくんで落ちたる一葉哉 (藤柳子集)

冬の日にきゆるやうせ沖の島

冬筥鹿こて人に喰はるれ

他郷に暮す身のたまゝ家へ歸り (芭蕉翁小文庫) 前書ナシ

客人の心になりて年忘れ (芭蕉翁小文庫)

暁のめをさまさせよはすの花 (炭俵)

海山の鳥啼立る雪吹かな (藤の實)

稲妻のしまらて秋を果しけり

夜を寒みから鮭つたか鼠哉

藻の花におもひもよらす鮭の針 (名月集)

芭蕉翁病中新禱の句

日にまして見ます顔せ霜の菊 (枯尾花)

芭蕉翁の病中

皆子せみのむし寒く鳴盡す

傷亡師終年

つゝに行宋祗も寸白夜の霜

三浦には九十三騎やはかまいり (有磯海)

日枝一つ前に置たる雪見かな

臆よに引や網場のからす貝

空せみとなるまでなくを仕事哉

難波

四つ橋の角立けるそ冬の月 (笈日記)

支考 鉄別

咲花の中をぬけ出て戻つまけ (笈日記)

芭蕉翁百ヶ日追悔

春風も面へ(と)百ヶ日 (後の旅)

かき上る泥の上千や梅の花
「梅櫻」

芭蕉翁追悼

「三七日間翁自畫之像乙州宅」ト前書シテ
諸家ノ句ヲ出セル中ニアリ

つく杖は三十棒や冬のかぜ (芭蕉翁行状記)

全

「四七日翁頭陀笠杖寄進義仲寺」

各題ニ物ノ有句ト前書シテ諸家ノ句ヲ
出セル中ニアリ

寝てかへる奈良の夜雨や笠のしみ

全 初月尾

風月の霜の鋏を折らしけり (芭蕉翁行状記)

全 六七日 路通亭座興行ノ内

雪吹ては雁鳴たゆる塚のズン

全

「反古さらへ」ト前書シテ諸家ノ句ヲ
出セル中ニアリ

こゝへ死ぬや旅の皮篋の虫のから

子にせうといへは逃こむふき籠 (芭蕉庵小文庫)

森の蟬すゝしきこゑや 暑さ声
「糺猿蓑」

菜大根の土に喰つくさむさ哉 (韻 寒)

菩薩とはなりてや道の餘り苗

蚊遣火や食にさしあふ面の岡

やゝさむく人をうかかふ鼠かな (砂 川)

鶯の傍にゆしろも鳴た良
「ヤ(初雁)」

涼しさもつのはせはしかつこ鳥 (淡路島)

根若の花や浮世の放氣もの

親仁さへ起さる先にみそさゝぬ
「花見車」

引はるや空にひとつの天の河

秋の風虫の声 (あはせ鳥
「旅枝」)

年の暮何しの種な鳴の中 (群語曾我)

「舎箱かあたま割けるに

帷子は着ともふどしわするゝな

鳴神や只鳴々夏の日の光

「石(成(當座柳) 鳥(當座柳) 石山の石にも蕉のうら表 (韻 寒)
水鳥の波に鼻つく眠り哉 (初蟬集)
「朝風(糺猿蓑) 更なる夜や蕉物姫のうちはもち (株能集)
幽霊のかはてよなく 葉喰 (鳥の道)
ひとつづゝ名乗てわたれ秋の鳥 (真木柱)
いきらはや父母もては花の春 (元孫成實 歳旦蝶)

身をおもふとき先人を知となく浴のさかひに
て倍り侍て
人形店の中に筒井がとしわすれ
見る所おもしろや はつ 櫻 (糺猿蓑)
取萱の内のあつさや 棒つかひ
行秋を鼓弓の糸の恨かな

鳴神や只鳴々夏の日の光

祇園會に

ちはやふる長刀鉞の無疵さよ
（茶のさうじ）

嘯く寐る種の夜の腹の味
（菊の道）

芭蕉翁七回足追善
幾霜の申くか癖になる
（雪の葉）

翁の二層足は加州にありて此のままならずかす
（の思を思ひて）

ひとつくかてへもならず玉ありれ
（草庵集）

世の中の年こそはよれ不如歸
鶯の行儀も花の元かため
（砂つはめ）

寸白も出て鳴せうて(三河小町)ちとなるやうて秋のかせ
子に酔て狸々舞や年忘
（きれく）

極月の人を泣すな鉢たよき
（初たより）

菊のかに出よくとけかの酔
（三河小町）

三井寺

寺くを鳴わけかぬるかんこ鳥
（三河小町）

行ちかふ蜜柑根ふかの匂ひかな
（三河小町）

年はかりよりて岩間のいはつし
（三河小町）

妙蓮をたつねありくかほとよぎす
（三河小町）

前うしろ枝やりさんほあつさ故
（當座拂）

かむ所あたる所や寒の入り
（小柑子）

ねんころも若やくきくの日のいわひ
（とてし）

鳴むしをゆすりかねたり小瓢單
（とてし）

あく霜の散をみかたに水仙花
（千鳥掛）

虫よく鳴いて因果かつきるなら
（千鳥掛）

鼻やぬくくとして春のかほ
（初たより）

かはつ啼此聞やうは有ふ物
（花の雲）

芝焼や出てわめきをるあ所
（三葉集）

鳥か啼はしいのおしやる

ほとよぎす虚言らしう夜の明けるぞ
（三葉集）

我住禪の皚は涼風の夜もにのたれあがりて人
有としらふ伏入たるにをのが軒に目をさま
して遊行事たぐく世

うたゝ寐の皚は人を佛とか
（駒 椒）

祖父姥の升かけいのれ蟬の声
（駒 椒）

すゝしさや船行ちかふ船の勢
（駒 椒）

取まはすひかりもさむし磨屋店
（駒 椒）

のまはのめ霞降夜の箔佛
（松壽集）

よしすから津に新酒て泥に成ル
（松壽集）

安房より供したるものをやまはたにつかはす
こと

六兵衛はかゝしと何を申やら
（土大根）

死んだかとおもへは起て梅のはな
（續山彦）

霜の夜や琵琶の海さへ音を出さす
（つはさ）

合歡を止めて蛙のかはつかな
（蛭 望）

知足亭にて

夏気色返すくもなるみ浮
（千鳥掛）

死る迄生てあらはや花の春
（布ゆかた）

枕下誰とはしらす初あらし
（夏の若葉）

門松や坊主一人もちりははす
（室陀橋本）

無常迅速

咲花も老行間日はなかりけり
（芭蕉望）

戻たすき懸けて同じく飛虫 (芭蕉監)
嗽の軒端ににっくと梅櫻 (芭蕉門人眞蹟)
鳥にもあはぬ山路やかんこ鳥 (都の花ゆゑ)

△書名不詳 (習月尼條參照)

申 (此又七も酔はしめ)

錦江女

しんなりとむかしゆかしき角大豆哉 大津 藤子菜
天津星うそにはしまぬ逢夜哉
とはすとも終に行なり秋の鳩 淡路島

親にはなれし人に

しほるゝやまたき時雨の藤衣
同じ身を誰にゆつりて蟬の衣

旅より帰りし人に

飛廻る鳥も古巢に雪の暮
吹落す木葉に包む霞哉 (藤の實)

芭蕉翁百ヶ日追悔

おかむ手にいとよしたるゝ柳哉 (後の旅)
鶯やよし有人のおく住居

芭蕉翁追悼

「三七日開翁自畫之像乙州宅」ト前書シテ諸家
ノ可ヲ出セル中ニアリ

霞降繪はかり見てもあられふか (芭蕉翁行状記)

全

別ニ諸家ノ追悼ノ可ヲ出セル中ニアリ

へんさんを着せても寒し假位牌

おしあふて雀よろこふ初日談 (元禄戌寅)
 窓先に面日こぼるゝ芭蕉かな (徳川(けふの昔))
 ふく風に障らてさはるやなきかな (青むしろ)
 畫の間のおしひのたけや飛虫
 「三河小町」「宰相橋本」

茶の花の今日は卒都婆を匂はする (雪の菜)
 からく〜と葉におもみや村すゝめ錦琴(砂つはめ)
 豆の教あまりかうじてとし忘 (大徳記(きれ))
 女郎花しなりくなりと秋くれて (花の雲)
 うぐひすに心とらるゝあさごんめ (三葉集)
 争やうきふししけき親まさり (柴はし)
 腹たぬぬ中の涼しさ見てたもれ (駒取)
 たなはたの小つまひりつく光かな

鶯のこゑにむつくり起て居る (松濤集)
 はつかすみ山の神さへわたリ眉 (三河小町)
 若木のはなの咲てめしに
 はじめての梅にしろすな東風のかせ
 遅くとくちるはめてたきさくらかな

第参輯引用俳書刊年表

新玉海集	延宝七	卯辰集	元禄四	住吉初語	元禄八	俳諧錦繡	元禄十	菊の道	元禄十三
俳諧雜巾	延宝九	文蓮集	如??	有磯海	〃	八雲巖巨塚	元禄十一	雪の東	〃
續虚乘	貞享四	雜談集	元禄五	後の旅	〃	續有磯海	〃	州之道	〃
ひとつ松	〃	北の山	〃	不かわし	〃	續有磯海	〃	俳諧金昆	〃
阿羅野	元禄二	葛の松原	〃	芭蕉結行狀記	〃	續有磯海	〃	草庵集	〃
前後圓集	〃	聖栗合	〃	芭蕉庵小文庫	元禄九	續有磯海	〃	珠洲之海	〃
いつを昔	元禄三	己か光	〃	初蟬	〃	續有磯海	〃	射水川	元禄十四
花 椅	〃	一字函蘭集	〃	浮世の北	〃	續有磯海	〃	砂つはめ	〃
ひさこ	〃	柞 原	〃	元禄拾遺	〃	續有磯海	〃	きれく	〃
江 鮭子	〃	藤獅子集	元禄六	桃ぬふり	〃	續有磯海	〃	蝶 寄	〃
其 萩	〃	桃の實	〃	喪の名残	元禄十	續有磯海	〃	荒小田	〃
新撰都曲	〃	炭 價	元禄七	菊の香	〃	續有磯海	〃	杜 櫻 菜	〃
續 蕨	元禄四	句 兄 弟	〃	梅 櫻	〃	續有磯海	〃	白 馬	元禄十五
西の雲	〃	藤の實	〃	鳥の道	〃	續有磯海	〃	初たより	〃
俳諧勸進帳	〃	名月集	〃	眞木柱	〃	續有磯海	〃	花の雲	〃
元禄百人一句	〃	枯尾花	〃	末若葉	〃	續有磯海	〃	二葉集	〃

昭和四年五月二十五日印刷
昭和四年五月三十日發行

蕉門名家句集 第三輯 定價金壹圓

繪畫家
發行所

神戸市上筒井通七丁目八番屋敷

安井

知之

印刷者

神戸市湊川町七丁目四番地

田中

信一

印刷所

神戸市湊川町七丁目四番地

夢路社

印刷部

神戸市上筒井通七丁目八番屋敷

發行所

なつめや書店

〒大阪府大正六八七二五番

終